なめくじキーホルダー

清水鱗造

灰皿町

近所の金物屋に行こうと自転車に乗りかけたとき、ちょうど郵便局のバイクが家の前で止まった。出かけようとしているのに気づいた郵便局員からクラフト封筒を渡された。差出人を見ると、「銅鉢巻管理事務局」と書いてある。

開けてみると、黄ばんで四隅がめくれている未記入の申請書類が出てきた。申請書は多量に印刷されたがめったに使われないので古くなって、劣化している感じだった。添付された紙には、中央に次のように印字してあった。

貴殿におかれましては、銅鉢巻がはずれましたことをお知らせいたします。

つきましては同封の銅鉢巻解放証明書発行申請用紙に必要事項を記入のうえ、事務局に提出してください。銅鉢巻から解放されたことの証明書発行申請になります。

なお、証明書発行と同時に温泉旅行券が配布されます。

提出期限はこの申請用紙が届いてから二週間ですので、早めに提出して、銅鉢巻解放証明書と同時に温泉旅行券を受け取ってください。

変な手紙とは思ったが、垣根の蔓性の植物が無闇に茂ってきたのを押さえる支柱を買うために金物屋に早く行きたかったので、とりあえず封筒を二つ折りにしてズボンのポ

ケットに入れ、自転車を漕ぎはじめた。

自転車を漕ぎながら銅鉢巻から連想したのが『孫悟空』に出てくる「緊箍児（きんこじ）」だ。あれはたしか、お経を読まれることによって締められるようになっている金色の鉢巻だ。考えてみれば、比喩的には誰でもいつなんどき締め付けられるかわからない鉢巻を締めているようにも思えないこともない。あるいは自分でいつのまにか締め付けてしまう鉢巻を。とにかく、それがはずれるとはめでたい事柄のような気もする。

「銅鉢巻管理事務局」の場所は、電車で三駅ほどだった。

駅を降りると、事務所へは、行程の半分近く動く歩道で移動する。ここは確か、外国へ行く機会にパスポートを作る事務所に向かうときに通った。

西に向かう道の左右にビルが立っている。

歩道の日の当たる場所に、破れた服を着て寝ている男がいた。立ち止まったのは、寝ている横に排泄物がとぐろを巻いているのに気づいたからだ。すると男はこちらを見た。うっかり目を合わせてしまうと「ほら」と言いながら、排泄物をこちらに投げたのだ。

「わっ」

胸に当たりそうだったので、右腕ではじいた。一瞬、これは服が汚れてまずいことになると思った。腕に「べちゃ」という感じで付くと思ったところ、とぐろを巻いた排泄物は腕に当たりゴムのように跳ねて一メートルぐらい前に落ちた。男はにやにやして、

「やられたと思っただろう？　それはプラスチックのおもちゃだよ」

と言った。通行人にいつもこんなふうにいたずらをしているのだろうか。

「汚いものの形だけで汚いということはない」

と説教くさいことも言われたが、いやな感じはしなくて、怒る気にはならなかった。男の顔は真っ黒に垢で汚れていた。それに髪の毛がタールを押し付けたように黒く固まっている。食堂の入口の前によくあるプラスチックの料理見本を思い出した。ラーメンなどいかにも、汁に麺と具が浸っているように見えるが、つかんでみると模型だ。でもおなかが空いたときには何のためらいもなく、店の前で見本を見て「これはおいしそう」という具合に選んで注文する。汚いものの形だけでは本当に汚いかどうかわからないと同時に、おいしく食べられるように見える形だけでは本当に食べられるかどうかわからない。

道路に寝ていた男は立ち上がって、かばんにプラスチック製の排泄物を入れた。通行人にとぐろを巻いたプラスチック製排泄物を投げて、びっくりさせて楽しんでいるよう

だ。

男は再び横になったが、頭のところのカゴに蛇がとぐろを巻いているのが見えた。これも作りものだろうと思って、よく見ると生きている蛇のようだった。肌色に近い色をした変わった蛇だ。ほとんど動かなかったが微細な振動で生きているとわかる。

そのとき、近くで事の始終を見ていた親子連れの幼児が「漢字ドリルだ」と言った。漢字ドリルに子どもがふざけて好む排泄物の名詞を使って覚えやすくする本がこのごろ流行っているので、子どもはフィギュアからそれを思い出したのだろう。

３Ｄプリンタで、プラスチック製の汚いものの模型を作ることは簡単にできると思う。ただし、形や色をセンサーで採集するときには本物が必要なので臭くて大変だろうとも想像する。

造花などのようにきれいなものの複製づくりも夢想した。真っ赤なバラの花が、空中に造形されていく過程は楽しい見世物だろう。

古い申請書類をかばんから取り出して、改めて見ると、黄ばんで四隅が内側にめくれていることはわかっていたが、紙を指で引っ張って確かめてみると意外に丈夫だった。